

4 豊中市「地球のお茶会プロジェクト～日本の常識 vs 世界の常識～」

(1) 事業の趣旨

人権尊重の視点で、子ども・青少年の社会参加を目指したプログラム開発を進める趣旨で「地球のお茶会プロジェクト」を実施する。事業の目標は以下の5点である。

- ・地球市民教育および国際理解教育の分野における、中高生の理解を深める
- ・中高生自身が、自らの思いや考えを社会に対して発信できる機会を提供する
- ・中高生が社会に対して発信する機会を、定期的・恒常的に実施するための仕組みを考える
- ・中高生のネットワークを構築する
- ・中高生自身の企画・立案能力を育てる

(2) 取組の概要

① 事業計画の企画立案組織と事業内容

豊中市は、平成12年度に続き人権感覚育成モデル事業を実施した。平成13年度は、「豊中市人権感覚研究実行委員会」が組織され、(財)とよなか国際交流協会・とよなか国際交流センターの代表、連合PTA 母親委員会の代表、人権教育推進委員協議会の代表など、16人の委員で、事業の全体を計画した。本年度のモデル事業は大きく四つの事業として、「インクルージョン」をキーワードとして計画された。それは、以下とおりである。

- a 地球のお茶会プロジェクト…留学生との国際交流、公園を利用してお茶会の開催、等。(本事業)
- b 公園づくりプロジェクト…公園について、小・中学生を対象にアンケート調査を実施し、その結果の検討を含め、子ども会議を開催、及び公園づくり・公園での遊び方の企画の募集を行う。また、公園内のスポーツ広場を活用し、子どもと障害者とがスポーツの交流を行う。
- c だれもが楽しめるレクリエーション大会…障害のある人々が核となって開催するニュースポーツを中心とするレクリエーション大会で、その支援者養成講座も同時に開催する。キーワードは「ノーマライゼーション形インクルージョン」。公園等を利用。
- d 表現の集い…総まとめとして、「地球のお茶会プロジェクト」及び、「レクリエーション大会」の参加者等が、市民会館大ホールにおいて、市内の少年文化館演劇クラブ等とともに、表現活動を行う。

これら四つの事業は、構造化がなされている。「地球のお茶会プロジェクト」事業は、これだけで完結しているわけではなく、各事業が相互に関連し合っ人権感覚の育成を行っていることに留意する必要がある。

② 本事業プログラム立案

「地球のお茶会プロジェクト」の企画は、「地球市民ジュニアの会」が中心となって企画し、実行委員会での検討を経て実施された。このジュニアの会は1996年(平成8年)に開催された「とよなか国際交流センター」の事業活動からスタートし、10代のメンバー(中・高校生5～6名)が中心に活動し、2名の成人がサポートしている。

プログラムの企画・立案に際しては、「ローカルな問題からグローバルな問題までを10代の視点から考える」、また、「参加しやすい雰囲気およびネットワークづくりからはじめる」という趣旨で取り組まれた。取組の理念として、「イベント等の企画・立案・実施を通して、自らの思いを社会へ発信するための手段を学ぶ」「大人が提供する中高生のためのプログラムをつくるのではなく、中高生自身によるプログラムづくりと実施とする」「イベントの内容より企画・立案・実施のプロセスの経験を重視する」「中高生をやる気にさせ、誘導し、支援するファシリテーターの役割を重視する」等が挙げられた。

③ 事業の構成

- ・企画会議を開催する
- ・国際交流パーティを、参加者を募集して実施する（イベントとしての「地球のお茶会プロジェクト」である「世界の人とパーティしようや！～日本の常識 vs 世界の常識～」の開催）
- ・お茶会企画会議の開催
- ・お茶会サロンの開催
- ・二回目の「お茶会プロジェクト」の開催と表現活動への参加
- ・関連事業との連携

④ プログラムと進行：「世界の人とパーティしようや！～日本の常識 vs 世界の常識～」

- 司会・進行・受付：ジュニアの会メンバー
- 自己紹介とアイスブレイキング
- 10時から12時：3か国3名の留学生（大阪大学）による指導で、調理室でお国料理を参加者とともに作る。
- 別室に移動し、作った料理をみんなで食べる。その際、料理の名称、材料の紹介をし、食事のしかた・あいさつなどをそれぞれの国の言葉で行い、自由に交流しながらパーティを行う。
- ジュニアの会の進行で、パーティ後、グループに分けて、外国を見ておかしいと思うこと、日本を見ておかしいと思うこと、などを出し合い、黒板に整理する。
- 外国人留学生も入れ替わり、各グループに加わり、意見を交換する。
- その中で、日本との生活習慣や文化の違い、考え方の違いおよび多様性を理解する。
- 閉会後は、全員で後片付けをする。

なお、実施日当初の予定は午後3時までであったが、低学年の児童が含まれていたため、話し合い・討論の時間の予定を繰り上げた。片付けの際、留学生と子どもたち（主に小学生）が自由に遊びだす場面があり、意図しない交流の場面が生じた。文字通りの触れ合いと遊びを通して、無条件に人間としての関わり合いを実感できたのではないかと思われる。

⑤ 事業実施と学習環境

豊中市は、人権擁護都市宣言をするなど、人権に対する人々の関心が高い地域とい

える。プロジェクトのみをとらえると、参加者が当初予定していた中高生よりも年齢が下がっていたため、十分な議論ができなかった嫌いがあるが、公民館を利用したため、調理室とパーティ会場などが確保しやすく、活動はスムーズに展開できた。

また、全体事業の企画・立案と深く関わる「指導者」という資源・環境も無視できない。地域にあって、その地域を熟知し、さまざまな団体とかかわり、広いネットワークをもっている指導者の存在は、団体や事業・イベントを結びつけるだけでなく、講師・指導者などの更なるネットワークづくりを可能にするものである。

⑥ ファシリテーター、コーディネーターの役割

個別事業のみならず、全体事業を支えるためには、中高生に意欲と関心を持たせ、継続的に参加を促す事が重要である。その点、いくつものプロジェクトと関連する事業をスムーズに運営するためには、その核となるコーディネーターと十分打ち合わせをした進行役のファシリテーターが重要である。各事業の成功だけで判断できないからである。その意味からも、各事業の事務局と全体の4事業のつなぎ役となる「人」の存在が重要である。

⑦ ネットワーク形成

いくつもの事業が複合されて全体の事業が構成されるとき、参加者や参加団体はもとより、指導者やファシリテーター、コーディネーターが相互に情報を交換し合うことは重要である。加えて、関連施設や関係団体間のネットワーク形成は、教育・学習資源の提供や人的資源の動員をもたらし、事業の成否を分けると思われる。地域の教育資源を熟知した人の存在がそれを可能にする。豊中市では、「野と森の遊び文化協会」の関係者が大きな役割を果たしている。

⑧ 学習法

単独の事業としてとらえるものではない以上、学習方法の選択は、学習環境と並ぶ教育・学習資源の活用の問題であるが、地域に存在するさまざまなものを「教育・学習資源」ととらえることが重要である。「公園づくりプロジェクト」は、昨年「タウンウォッチング」の事業の流れをもつ体験学習・ワークショップである。地域や日常生活と結びつく企画案が、日常を見直し、態度や意識の変容、感覚の再構成を促す上では重要と考えられる。

(3) 人権感覚育成プログラムに関する提案

① 複数の事業を関連づける

全体が複数の事業から成り立っており、目的や方法が相互に関連するだけでなく、参加者が少しずつ異なる中で、交流し、ネットワークを拡大するように仕組みられている点は、プログラム作成上重要な点と考えられる。複数の事業をつなぐことによって、いろいろな場面での気づきを取り込んだプログラムに仕上げることができる。そして、これを支えるのは、事務局と人材のネットワークをもった有能な講師でもありコーディネーターであろう。

② 継続性を重視する

地域生活に結びついた事業は、何かについて学ぶという以上に、「自らが付き、変容する」ということが重要な要素であり、それを実現するためには継続性が鍵とな

る。参加者が継続的に学習活動に参加することにより、気づきの範囲が広がり、意識が少しずつ変わり、やがて、行動につながっていくのである。さらに、継続されることによって参加者が拡大する可能性も広がってくる。

(山本 和人)